

4 職員研修

(1) 大学図書館職員短期研修について

- ① 主 催：国立大学法人京都大学
- ② 日 時：平成28年10月4日（火）～平成28年10月7日（金）
- ③ 会 場：京都大学附属図書館3階 ライブラリーホール

(2) 研修報告

平成28年度大学図書館職員短期研修報告

福山市立大学附属図書館 藤上奈緒美

平成28年10月4日から10月7日まで、京都大学にて開催された大学図書館職員短期研修に参加した。大学図書館活性化のために図書館業務の基礎知識や最新知識を習得することを目的とし、11コマの講義を受講したほかグループ討議・報告会を行った。

講義内容はいずれも、大学支援・大学連携及び電子化への対応に関することだった。ここでは、講義概要を「変化する大学とその支援」「電子化と図書館」の2点に分け、グループ討議及び所感と合わせて報告する。

【変化する大学とその支援】

『大学図書館の現状と課題』では、大学図書館があるべき姿に向かうため組織としてどのような目標付けを行うべきなのか、大学図書館の現状と課題について話された。本来の大学図書館のあるべき姿は、大学の目的実現を支援するために資料を収集・整理・保存・提供し、さらに学内で創作される資料を蓄積及び発信することである。しかし、近年の電子化により資料は「所蔵・所有」するものから「アクセス」するものへと変化しており、図書館は機能面（「アクセスの保障」）を強化することが重要視されている。

また、資料だけではなく大学のユニバーサル化やグローバル化など、大学図書館を取り巻く環境も変化しているため、その時代に合った大学支援をしていくことが求められている。『大学図書館職員のスキルアップ法』と『学習・学習支援と大学図書館の役割』では、新しい大学図書館員像や大学における学びとその支援について、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）：変革する大学にあって求められる大学図書館像」（2010年12月、科学技術・学術審議会学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会）を参考に話された。

【電子化と図書館】

前述したとおり、資料は「所蔵・所有」するものから「アクセス」するものへと変化しており、図書館は機能面を強化することが求められている。

『電子コンテンツのいま』では電子コンテンツの利便性と課題について話された。電子コンテンツは、冊子と違い保存スペースが不要で24時間どこからでも利用が可能であるが、利用者にアクセス権を提供するための環境づくりが必要である。電子コンテンツの契約モデルには、個別タイトル購読やパッケージ契約、Pay per View(PPV)、アグリゲータ、などがあり、それぞれにメリット・デメリットがある。例えばPPVは論文単位での購入が可能であるが論文をダウンロードした人しか見ることができないので、図書館の資産にならない。その他、為替変動による価格上昇などの課題も多いことから、電子コンテンツのオープンアクセス化が求められており、機関リポジトリの充実や学術雑誌のオープンアクセス化を目的とするOpen access2020が創設される動きがある。

また、『国立情報学研究所の学術コンテンツ事業紹介』でもオープンアクセスについて触れられた。国立情報学研究所(NII)では大学図書館などと連携しながらNACSIS-CAT/ILLやJAIRO Cloud、CiNII、KAKENなどのサービスを提供している。それらのサービスの課題として挙げられたのが、KAKENの研究助成成果のオープンアクセスの対応強化である。課題解決のためには組織内だけでなく大学との連携が必要であり、NIIと国公立大学図書館協力委員会との間に「連携・協力推進会議」を設置している。

【グループ討議】

グループ討議・報告会では、各班に課せられたテーマについて討議したものを報告した。テーマは「海外調査研修計画を企画立案する」「多様な学術情報の発見と活用を支援するツールを考える」「図書館と学内他部門及び教員との連携による課題解決を考える(教育・学習支援)」の3つだ。私の班は「海外調査研修計画を企画立案する」をテーマに討議した。討議をするにあたって『効果的なグループ討議法』で学んだ、討議への参加の平等性を確保する「ラウンド＝ロビン」(順番に話す)という技法を活かすことができた。さらに、「ラウンド＝ロビン」を応用した「ありがとう見つけ」(グループ討議を振り返り左隣の人に順番に感謝していく)をすることで、円満かつ友好的なグループ討議となった。グループ討議の成果物は京都大学の学術リポジトリにて公開されている。

【所感】

この研修を通して大学図書館は大学を理解することが重要であると感じた。大学の目指す方向性を理解していなければ支援に繋がらず自己満足に終わってしまう。数名の講師が、「所属大学の理念や教育方針を言うことができるか」という質問を受講者に投げかけたのが印象に残った。また、大学と知識の共有をすることも重要であり、研修などで学んだことを大学全体にフィードバックすることが大学支援に繋がる。時代に合わせた支援は様々であるが、大学と連携することはいつの時代も変わらない支援の1つであるように感じた。今後はこの研修で学んだことを活かし、所属する大学の目指す方向を把握したうえで大学図書館としてできる適切な支援は何かを見いだしたい。

最後に、この研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に心より感謝の意を述べたい。また、研修に参加するにあたり業務を支えてくれた職場の方々にもお礼を申し上げたい。

平成28年度大学図書館職員短期研修参加報告

名古屋市立大学 総合情報センター川澄分館 林 マリ子

平成28年10月4日から7日までの4日間、京都大学にて開催された大学図書館職員短期研修に参加した。講義は全部で11コマあり、各分野でご活躍されている方のお話を伺うことができた。さらに、講義で学んだ内容を踏まえたグループ討議および討議内容のプレゼンを行った。講義は多岐にわたるものであったが、今を知り、今後大きく変わりゆく大学図書館に自分がかかわっていくかを考える良い機会となった。ここでは特に印象に残った3つの講義とグループ討議について所感をまとめる。

大学図書館の現状と課題 京都大学附属図書館事務部長 甲斐重武氏

大学図書館を取り巻く状況は少子化、電子化など大きく変化している。このような変化に対応するためには、図書館の強みである他大学や他部署との連携体制を学内に広めると共に、学内に対して図書館の専門性を活かした支援を行っていくことで図書館の位置づけを明確にすることが必要であるということであった。

本講義は大学の現状と大学図書館が果たす役割を知るとともに、管理職の立場から見る大学図書館像を知る貴重な機会ともなった。甲斐氏は講義中、「自分の言葉で表現できるように」「若いうちからアンテナを張り、リーダーとなる意識を」と随所で述べられていた。これまで大学および大学図書館の現状や課題については他の研修でも知る機会があったが、自分の問題として実感するには至っていなかった。ただ聞くだけでなく、理解して自分の言葉に置き換えることが必要であると感じたので今後心がけるようにしたい。また、NACSIS-CAT/ILL や JUSTICE など大学図書館には大学の枠を超えて協力し合う体制があり、これは他部署では珍しいというお話があった。納得するとともに、私も学外に頼り頼られる図書館仲間をつくっていきたいと感じた。大学や図書館全体を意識するのは難しいことだが、情報共有できる仲間を増やして少しずつ意識するようになりたい。

効果的なグループ討議法 久留米大学外国語教育研究所(教授) 岩田好司氏

メンバーで共同し、体験しながら効果的なグループ討議の仕方やさせ方を学ぶことができた。これまでのグループ討議では、リーダーや書記など役割だけ決めて意見のある人が発言するようなグループ活動だった。しかし、本講義でグループ討議の意義や傾聴の仕方、平等な意見の出し方を知ることができたのは勉強になった。中でも、「ラウンド＝ロビン」という技法は全員の意見を平等に聞くことができるため良かった。この技法は、一人ずつ順番に口頭で意見を述べ、聞き手はそれを傾聴して「心のノート」にメモし、話し終わってからメモした記憶から質問等を行うという方法であった。全員の意見が聞ける上、「心のノート」から話を進められるため活発な話し合いが期待できそうである。今回学んだグループ討議のやり方や技法を、今後自館のガイダンスやセミナーに取り入れていきたい。

学習／学修支援と大学図書館の役割

筑波大学図書館情報メディア系・知的コミュニティ基盤研究センター(教授) 呑海沙織氏

職員と教員の双方を経験した方ならではの、多忙な教員の現状や教員の立場から見た図書館についてのお話が今後連携を考えるうえで大変参考になった。呑海氏によると図書館同様に教員を取り巻く状況も大きく変化しており、アクティブ・ラーニングや教育学習支援システムの導入、グローバル化への対応等の教育・学習面に加え、研究面でも成果を上げることが求められているとのことであった。想像以上に多忙な教員の実情を知ることができた。また、数々の答申にもあるように図書館には社会的な期待が寄せられているが、図書館のことを知らない教員が多数であり、そのような教員に図書館のことを「知らせる」ことが教職協働を実現させるためには必要だとわかった。忙しい教員とどう連携していくかは難しい問題だが、今回学んだ内容をより良い学習／学修支援に活かしていきたい。

グループ討議

グループ討議では、3つのテーマに分かれて討論を行った。3つの内容は、<テーマ1：海外調査研修計画を企画立案する><テーマ2：多様な学術情報の発見と活用を支援するツールを考える><テーマ3：図書館と学内他部門及び教員との連携による課題解決を考える(教育・学習支援)>であり、私はテーマ3を選択した。最後に、教員や他部署と連携してアクティブ・ラーニングを取り入れた発展的な情報リテラシー教育を提案した。図書館が連携や情報リテラシー教育のノウハウを活かして歯車の軸となり、教員や各部署との連携を進めていくというものである。講義で得た知識も取り入れ、楽しみながら学べる内容とした。短い時間でリポジトリに公開できるようにするのは大変だったが、メンバーと協同して完成させ、達成感とメンバーとの一体感を得ることができた。

グループ討議での話し合いや他グループのプレゼン通して、改めて図書館の役割について考えることができた。また、一人では思いつかないアイデアを得ることができた。今回学んだことをより良いサービスを提供するためのヒントにしていきたい。また、グループで考えた発展的なリテラシー教育は今後のガイダンス等に取り入れてみたい。

まとめ

今回の研修に参加して熱意ある仲間達から多くの刺激を受けることができた。所属する大学の規模や現状に違いはあるものの共感できる話も多く、有意義な交流であった。その中で互いに協力し合う「つながり」の大切さを実感した。人との「つながり」を大切にして、学内外に頼り頼られる仲間を増やしていきたい。そしてその仲間との情報共有や助け合いを通して大学や大学図書館についての課題を解決していきたい。

最後になりましたが、この研修に参加する機会を与えてくださった公立大学協会図書館協議会に心よりお礼申し上げます。また、研修期間中の業務をサポートしてくださった職場の皆様に感謝いたします。

10/4 (火)	9:30～ 9:45	開講式
	9:45～11:00	大学図書館の現状と課題 / 甲斐重武 (京都大学附属図書館事務部長)
	11:15～12:30	大学図書館職員のスキルアップ法 / 井上品彦 (関西学院大学神戸三田キャンパス図書メディア館課長補佐)
	13:45～15:00	学術情報リテラシー教育の現状 / 須賀井理香 (東京大学情報システム部情報基盤課学術情報チーム(学術情報リテラシー担当)係長)
	15:10～15:55	海外研修経験から見た大学図書館(1) / 石山夕記 (東京外国語大学総務企画部学術情報課目録係・係員)
	15:55～16:40	海外研修経験から見た大学図書館(2) / 藤順一 (早稲田大学図書館利用者支援課)
	16:50～17:40	開催大学図書館見学
	17:55～19:25	情報交換会
10/5 (水)	9:30～12:20	効果的なグループ討議法(講義) / 岩田好司 (久留米大学外国語教育研究所長(教授))
	13:30～14:45	大学図書館における目録実務とNACSIS-CATシステムの現状及び今後の構想 / 藤井眞樹 (一橋大学学術・図書部学術情報課目録情報係長)
	15:00～17:30	グループ討議
10/6 (木)	9:30～10:45	電子コンテンツ導入・利用の現状と課題 / 森嶋桃子 (慶應義塾大学メディアセンター本部電子情報環境担当)
	11:00～12:15	学術コミュニケーションの動向 / 林豊 (九州大学附属図書館eリソースサービス室リポジトリ係員)
	13:30～14:45	大学教育の現状と大学図書館の役割 / 呑海沙織 (筑波大学図書館情報メディア系・知的コミュニティ基盤研究センター(教授))
	15:00～17:30	グループ討議
10/7 (金)	9:30～10:15	国立情報学研究所の学術コンテンツ事業紹介 / 細川聖二 (国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)
	10:15～11:15	グループ討議・報告会(前半:発表と質疑応答含む)
	11:20～12:20	グループ討議・報告会(後半:発表と質疑応答含む)
	12:20～12:40	講評 / 甲斐重武、細川聖二 (京都大学附属図書館事務部長、国立情報学研究所学術基盤推進部学術コンテンツ課長)